

## 区民協議会施設見学研修報告

令和元年 12 月 3 日(火) 横浜消防の救難救助体制を見学

区民協議会では、横浜消防における災害時の救難救助体制の現状を知るべく見学会を行いました。

前半は、区役所会議室で特別救助隊の隊長さんから、国内の大災害時での応援派遣体験談をお聞きしました。横浜消防では各区の消防署管内に特別救助隊という 8 人体制の救難救助業務を主任務とする組織を配置し、特別な救援救助が必要な現場に駆けつけるそうです。今回は、神奈川消防署松見消防出張所に置かれている、この組織の柳田隊長のお話しをお聞きしました。柳田隊長は東日本大震災や伊豆大島豪雨災害に救助活動隊として応援派遣された方で、その時の体験を話されました。

東日本大震災では、神奈川県内の市町村からの部隊が集結し神奈川県隊として車両を連ね陸路を10時間以上掛けて仙台へ行き、民間の駐車場が基地となったそうです。持参のテントで寒さと闘いながらの寝泊まり、 $\alpha$  米の備蓄食とインスタントラーメンの食事で、活動は車両で行けるところまで行って、そこからは重い救助資材を担いでひたすら歩き回っての捜索活動の毎日を1週間近く行ったそうです。柳田隊長はここでの経験で、報道される状況と、実際の現場で臭いや肌を交えた五感で感じる状況は、全く異なる“もの凄さ”を感じたそうです。

伊豆大島では、陸路とはいかない為、横浜市の2基のヘリコプターで隊員と資材をピストン輸送しての派遣となりました。ここでは、ホテルの水を抜いた屋内プールの中が寝床となり幾分快適？な生活となったそうです。活動は、ここでも重い資材を携えての歩行となり、道路復旧と捜索活動の為の倒木の伐採、土砂の撤去を夜間作業も含め連日作業し、疲れ果てたそうです。

これらの、災害現地派遣で柳田隊長は次の4点が大切であると痛感したそうです。①自然の力は脅威である事を肝に銘じておく。②強靱な肉体とその場に応じた判断力を養っておく。③メリハリを付けての作業を行う。特に若い人は我を失ってやり過ぎてしまうので要注意。④残った家族や同僚も負担が増し、大変迷惑を掛ける事となるので、派遣への協力に対する周りの人への感謝の気持ちを忘れない。 現地を体験された方ならではのお言葉だと思われました。



後半は場所を鶴見消防署鶴見水上消防出張所に移し、水難救助の訓練を見学しました。こちらは大黒ふ頭にあり、ベイブリッジのほぼ真下の横浜港に面した位置です。この出張所は横浜市で唯一の水上消防救助部隊という隊の活動拠点となっています。港湾区域や河川での災害に対して水上消防と水難救助の両面から連携して対応できるよう平成 31 年 4 月に組織され、45 名が配属されているとの事です。因みに市内の残り 17 区には、潜水活動実施隊が 5 つの区に、水面救助指定隊が 12 の区に組織されているそうです。

この隊が保有する船舶等としては、消防艇が「よこはま」と「まもり」の2艇、救助艇が「ゆめはま」の1艇、水難救助車が1台あり、消防艇は船舶火災への消火の他、湾岸の火災にも対応し、「よこはま」にあっては毎分5万リットルの放水(小学校のプール満杯の水を5分で空にする)が可能で、100メートル以上の距離迄放水できる全国でも数少ない性能を持つそうです。因みにお値段は1艇で10億円をチョイ超える額であったとのこと。救助艇は水難救助用の為、時間勝負で、小さいながら時速50キロで航行、小回りも効くそうです。



当日は水難救助訓練風景を「よこはま」の船上から見学させて頂きました。寒空の中、実際に海面に落ちた遭難者に救助艇で近づき、泳いで助け上げる訓練や水中に沈んでいる人を潜水で捜索する訓練、火災発生の船舶に乗り込み、乗船員を救助する訓練を拝見しました。いずれも非常に厳しい訓練を受けて合格した隊員が、海上保安庁の「海猿」と遜色ないと自負する通り、機敏で整然とした動きで、一同目をみはるばかりでした。

最後に水難救助車の車内を見させていただき、救助道具や隊員用のウエットスーツ、空気ボンベ等が大量に積載されているのを見てこれまた納得でした。横浜は世界有数の港を持ち、船舶の往来も多く、また湾岸には多くの工場やコンビナート、コンテナターミナル、米軍施設等があることから災害への対応は最重要と考えられており、全国でもトップクラスの体制及び装備が整えられているそうです。その為、市内の事故のみならず東京、千葉、横須賀などの事故にも応援派遣し、その成果は高く評価されているとのこと。

今回は横浜消防の災害時における救助体制について、神奈川消防署および鶴見消防署のご協力により色々なことを知ることができ、一同大変感謝しています。また、全般に体制や装備が非常に充実されていて大変心強い感を受けました。これらは、近々発生が予想される首都圏直下型の大地震時のような巨大災害に大きな効果を発揮すると思われます。同時に“個人個人の防災意識と身近な備え”も重要であると思われます。

